

秋篠寺と伎芸天像

奈良、秋篠寺（あきしのでら）は

宝龜十一年（七八〇）光仁天皇の勅願に依つて善珠僧正の創立、藥師如来像を本尊とする寺院であるが、伎芸天像もこの寺の創建の頃、他の多くの仏像とともに造顯されたものと思われる。

しかしその後、平安時代の末、一二三五年兵火のために金堂等が焼失した際、この伎芸天像も御首部を残し御胴体が大きく破損し、鎌倉時代に於いて再び御胴体が造られ現在のお姿を見るに到つた。したがつて現在のお像は御首部だけが奈良時代の作（乾漆造）であり、御頸部以下御胴体は鎌倉時代の作（寄木造）であります。ともにきわめて写実的な作成をもつて全体が統一され、かすかに憂いをおびた表情の優美さとともに、肢体の豊満さと、まれに見る微妙な動きはこの天女像の大きな特色である。昨年七月十三日筆者終戦後久しう振りに菩提樹の花咲く同寺を訪い詳

回想斷片

岡本志良

(九鈴会員) 元旦

その頃の店は宇治川にあり、毎朝宇治川沿いに朝臭（浅草）通り一糸尿車が集中的に通つた――歩いて通り通つた。建物は当然焼打後のバラックで暗い感じの古いものであつた。しばらくして居留地にあつた国際汽船へ助勤を命ぜられた関係もあつて、宇治川の店は莫然とこゝへ奄えて、いま

宇治川の店は漠然とした覺えていた。割合はつきり覚えているのは最初から助勤に出されたことで、やはり自分は成績も悪く体も小さいため自分は成績も悪く体も小さいため

ことを嬉しく思つたものである。通勤路も山手通を東へ三宮駅西の踏切から元町に出て居留地へ入る経路に変つたが、勤務は開店前の整頓、朝夕の清掃又夜学へ通うなど仲々多忙で、ゆつくり歩けなかつた記憶である。この建物とも別れる時期が来て居留地から去つたのは昭和二年（一九三七年）であるから、在店は七十年生存の一割七年でしか当らない。しかしこの期間は少年から兵隊検査を過ぎる青年までの成長期であつて重要な時期であった。更に神戸を第二の故郷と信じていた私にとって、この離別は深刻なものがあり、諦めきれない思いがしたものである。

★秋篠寺縁起

ある時天上では、大自在天王（シバ神）が大勢の天女たちにかこまれて、天界の音楽や踊りを楽しんでいた。すると忽然として大自在天王の髪の生え際から一天女が生れ出た。

その容姿の端麗なことはもとより、伎芸に秀でていることは、並いる天女達の遠く及ぶところではなかつた。居合わせた天人天女達は一斉にその勝れた才能を称えて、彼の天女を伎芸天と呼んだ。伎芸天は、多く集つた天人天女達の中に立つて、「もし、世に祈りをこめて田畠の豊作や、人生の幸せや、家庭の裕福などを願う者があれば、私がその願いをことごとく満足させよう、また学問や芸術に関する願いを寄せる者にはその祈願をすみやかに成就させよう」と語つた。（漢訳密教典「伎芸天念誦法」より転載）

追記 従来、この伎芸天像に宝冠はなきものと知られて来たが、今回計らずも泉大津市正木美術館に之が

蔵されていることが教えられた。宝冠は木彫極彩色、在銘あり、創建年数逆のぼること十年前秋篠王がこの像を奉持したものということである。將に古美術学界の新発見とも見られ

編

此の手紙は五十年前鈴木商店の全社員が受取つた感銘の手紙である。當時私は満二十二才の若造、其の若造迄の行届いた手紙を下さつた労務管理のあり方を肝に銘じ、昭和九年函館大火で家財全焼多年職員御一同ノ奮勵努力ニ依リニ至リタル我鈴木商店モ輓近種々テ店情困頓ニ陥リ候結果今回一先サルコト、相成候爲メ遺憾ナガラ身分ヲ無給休職ト爲スノ外ナキニ下度候尤モ追テ整理成リ復興ノ緒ニ待ツヘキモノ多カルヘシト被存是亦御承知置被下度尚此機ニ於テルト共ニ御一同ノ御健康ヲ切祷致昭和貳年四月

の際も焼く事なく今日迄温存して
来たものである。五十年後の今日
皆様と共に今一度此の手紙を見て
鈴木時代の感銘を新に致し度く敢
えて「たつみ」に寄せた次第です。

店運ノ隆昌ヲ見休戚ヲ共ニシテ今日
ノ事情ニ因リ事志ト違ヒ善處策盡キ
休業ノ上一大整理ヲ爲スノ止ムヲ得
御一同ニ對シ別途通達ノ通り其ノ御
至り候次第苦衷御諒察不惡御承引被
ニ就キタル上ハ又復御一同ノ御盡力
候故其節ハ更メテ御通知可申上ニ付
年來ノ一方ナラサル御勤勞ヲ感謝ス

鈴木合名會社
代表社員 鈴木よね
株式會社鈴木商店
社長 鈴木よね

した。

黒塗りの自動車が着いて玄関を入れられるお家さんのお姿、時々廊下で会つて直立不動の姿勢で見送った金子さんの後姿、廊下の人の往来、ゴタゴタした事務室の中、コンニヤク版室の賑い、さては海岸通りに面した会計の室と自分の係の室との間を行ったり来たりして代金請求の断りに困った解散末期の事など追憶の場として沢山の思い出を残す場所でありました。

に愉快に騒げるものかと思った。恐らく他から聞けば酒の出た宴会と感じにちがいない。これも若き日の特権であつたとなつかしく思う。

キンツバ宴会がいつ頃から酒の宴になつたかは記憶にないが、多分十八、九才頃であつたと思う。忘年会や送別会などは料理屋でやつたし、酒に弱い体質の僕が悪酔をして苦しんだ記憶がある。

煙草も殆んど同じ頃から吸いはじめたと思う。共に法律違反であつたが、早く大人になりたい大人気取がしてみたが、今も昔も変わら

在店七年の大半分は未成年時代であつた。少年とは云え一騎当千の傑物多くそれぐゝ個性があつて仲々優秀な人材を集めたものであつた。それだけに日常生活にも真剣さがあり、男子一度郷閥を出づればの感があつて暗黙裡の競争が行われていたようである。

してみたい気持ちからで
つていいない。

恋心と勉学

しかし年月がたち年頃になると外
界の影響もあり次第に生意気になつ
ていったが、その頃の一つの現れと
してキンツバ宴会があつた。大人の
酒宴と同じように何かの会合がある
と元町の高砂で買ったキンツバを食
いながら大声で色々な歌をうたつた
ものである。中にはいかがわしいも
のもあって、よくも酒なしでこんな

恋心と勉学

丁度少年から大人になる時期に在店したのだから、少し位の浮いた話があつても不思議ではない。内氣で消極的性格の自分にもいくつかの思出があつたが、総じて降つては消える淡雪のようなものであつた。更にプラトニックラブを賛美して恋は神聖であるべきだと考えていた時代で

